

大人になれなかつた弟たちに……

米倉齊加年

僕の弟の名前は、ヒロユキといいま
す。僕が小学校四年生のときに
生まれました。そのころは小学校とい
わずに、国民学校といっていました。

僕の父は戦争に行っていました。

太平洋戦争の真っ最中です。
空襲といって、アメリカのB29とい
う飛行機が毎日のように日本に爆弾を
落とすにきました。夜もおちおち寝て

いられませんか。毎晩、防空壕という
地下室の中で寝ました。

地下室といっても、自分たちが掘っ
た穴ですから、小さな小さな部屋です。
僕のうちでは、畳を上げて床の下に穴
を掘りました。母と僕で掘ったのです。

父は戦争に行つて留守なので、家族は、
僕と母と祖母と妹と弟の五人です。五
人が座つたらそれでいっぱい穴です。



弟は生まれて間もないのですが、いつも泣かないで一人でおとなしく寝ていました。母は穴を掘りながら、ヒロユキがおとなしいから助かる、と言っ

ていました。そのころは食べ物がないので、母は僕たちを食べさせて、自分のはあまり食べませんでした。でも弟のヒロユキには、母のお乳が食べ物です。母は自分が食べないので、お乳が出なくなりました。ヒロユキは食べるものがありません。おもゆといって、かゆのもつと薄いのを食べさせたり、やぎのミルクを遠くまで買いに行つて飲ませたりしました。でも、ときどき配給がありました。ミルクが一缶、それがヒロユキの大切な大切な食べ物でした……。

ようみんなにはとうていわからないでしようが、そのころ、甘いものはずえんぜんもなかったのです。あめもチョコレールにもアイスクリームも、お菓子はなんつた僕には、甘い甘い弟のミルクは、だれが出るほど飲みたいものでした。

母は、よく言いました。ミルクはヒロユキのご飯だから、ヒロユキはそれしか食べられないのだから――

でも、僕はかくれて、ヒロユキの大切なミルクを盗み飲みしてしまいました。した。それも、何回も……

僕にはそれがどんなに悪いことか、よくわかっていたのです。でも、僕は飲んでしまったのです。僕は弟がかわいくてかわいくてしかたがなかったのです。……それなのに飲んでしまいました。

あまり空襲がひどくなってきたので、母は疎開しようと言いだしました。それである日、祖母と四歳の妹に

岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 中12学期 9月 星の花が降るころに

した。僕と母と祖母と妹、それに弟は、
その馬車の荷物の上に座って、ゆらり
ゆらり揺られながら、朝、家を出て、南
に向かって旅立ちました。福岡から南
へ二十キロくらい行つた、石釜という
山あいの村です。



馬車の上で昼のおむすびを食べ、
昼すぎには、きれいな溪流に沿って
山路へかかりました。美しい青空、桃
の花が咲く山村、橋の上からはあゆ
泳ぐのが見られます。生まれて初めて
見る、それは桃源郷でした。
これからはまだわから始める苦しい生活など、僕
にはまだ、毎日あゆをとっておかず

にすれば母が喜ぶだろうと思ったりして、これからの生活に胸をはずませました。
僕たちがお世話になる農家は、すぐ裏の山が頭の上におおいかぶさるような山すそにありました。その農家の庭に面した六畳間の一部屋を借りました。家の前の溪流には飛び石が対岸に続き、大雨の日は渡れません。下流の橋を渡って学校に行きました。
母は生まれて初めて田植えを手伝い、昼に出されるご飯を僕たちに残して、持つて帰ってきました。
僕たち疎開者には配給もありませんが、母は自分の着物を持つていき、近所の農家の人たちをお願いして、米と交換してもらっていました。
疎開しても、ヒロユキのお乳には困りました。隣村にやぎを飼っている農家があると聞いては、母が着物をふろしきに包んで出かけました。
母の着物はなくなりました。僕はよく川ヒロユキをおんぶして、

へ遊びに出かけました。僕は弟が
欲しかったので、よくかわいがりまし
た。

ヒロユキは病気になりました。僕
ちの村から三里くらい離れた町の病院
に入院しました。僕は学校から帰ると、
毎日、まきと食べ物と祖母に用意して
もらい、母と弟のいる病院に、バスに
乗って出かけました。

十日間くらい入院したでしょうか。

ヒロユキは死にました。暗い電気の下で、小さな小さな口に
綿にふくませた水を飲ませた夜を、僕は

は忘れられません。泣きもせず、弟は
静かに息をひきとりました。母と僕に

見守られて、弟は死にました。病名は
ありません。栄養失調です……。

死んだ弟を母がおんぶして、僕は

片手にやかん、そして片手にヒロユキ
の身の回りのものを入れた小さな
ふろしき包みを持って、家に帰りまし
た。

白い乾いた一本道を、三人で山の村

に向かつて歩き続けました。バスがある
りましたが、母は弟が死んでいるので
ほかの人の遠慮したのでしよう、三里
の道を歩きました。
空は高く高く青く澄んでいました。
ブウーンブウーンというBGMの独特の
エンジンの音がして、青空にきらつき
らつと機体が美しく輝いています。道
にも畑にも、人影はありませんでした。
歩いているのは三人だけです。
母がときどきヒロユキの顔に飛んで
くるはえを手ではらいながら、言いま
した。

「ヒロユキは幸せだった。母と兄とお
医者さん、看護婦さんにみとられて
死んだのだから。空襲の爆撃で死ねば、
みんなばらばらで死ぬから、もつとか
わいそうだった。」

家では祖母と妹が、泣いて待っていた
ました。部屋を貸してくださっていた
農家のおじいさんが、杉板を削つて
小さな小さな棺を作っていてください
ました。弟はその小さな小さな棺に、母

と僕の手で寝かされました。小さな弟
でしたが、棺が小さすぎて入りません
でした。

母が、大きくなっていたんだね、と
ヒロユキのひざを曲げて棺に入れました
た。そのとき、母は初めて泣きました。
父は、戦争に行つてすぐ生まれました
ロユキの顔を、とうとう見ないままで
した。

弟が死んで九日後の八月六日に、ヒ
ロシマに原子爆弾が落とされました。

その三日後にナガサキに――。
そして、六日たった一九四五年八月
十五日に戦争は終わりました。

僕はひもじかったことと、弟の死は
一生忘れません。

『大人になれなかった弟たちに』 米倉 斉加年

目標 登場人物の行動や情景描写などに着目して、心情をとらえる。

第一場面 戦時下の家族の生活

状況・出来事

- ・太平洋戦争真っ最中
- ・家族：父は戦争に行つて留守。「僕」・母・祖母・妹生まれて間もない弟のヒロユキ。
- ・空襲のため、毎晩、防空壕で寝ていた。
- ・配給のミルク一缶がヒロユキの大切な食べ物だった。

行動・情景描写

☆母は「僕」たちに食べさせ、自分はあまり食べなかった。
・ミルクはヒロユキのご飯だから、と母はよく言った。

★「僕」はかくれて、弟の大切なミルクを何回も盗み飲みした。

心情

☆自分よりも子どもたちに食べさせたい。
★甘いミルクはよだれが出るほど飲みたいものだった。
★悪いことだとわかっていたし、弟がかわいくてしかたなかったのに…。

第二場面 疎開

状況・出来事

- ・引越しの相談に行ったのに、食べ物をもらいにきたと誤解される。
- ・石釜という村に疎開した。
(子供だった「僕」には桃源郷のように見えた。)

行動・情景描写

☆その時の母の顔Ⅱ強い顔、悲しい悲しい顔、美しい顔

- ・母は着物を米ややぎのミルクと交換してもらう。
- *やぎのミルクはヒロユキ用だった。

心情

☆僕たちを守ってくれる母の顔は美しい。あのときのことを思うと胸がいっぱいになる。

第三場面 弟の死

状況・出来事

- ・ヒロユキが病気になり、町の病院に入院。
- ・十日間くらいして、ヒロユキは死んだ。
病名はない↓栄養失調
- ・棺が小さすぎて入らず、ひざを曲げて入れた。

行動・情景描写

・「ヒロユキは幸せだった。」と、ヒロユキの死を受け入れようとしている。

☆弟を棺に入れるとき、母は初めて泣いた。

心情

☆十分な食べ物がない中でも、ヒロユキが**大きくなっていた**ことを知り、こらえきれなくなった。

結び

状況・出来事

・一九四五年八月十五日に戦争が終わる。

行動・情景描写

☆僕はひもじかったことと、**弟の死**は一生忘れない。

心情

☆戦争を二度と起こしてはならないといおう強い思い。